全国の園長先生に無料で年2回お届けしています

2016 春 Spring

子どものよりよい育ちをともに考える
ベネッセの情報誌

これからの幼児教育

第1特集

保育の質の向上につながる保護者との関係のあり方を考える

玉川大学教育学部教授 **大豆生田啓友**（おおまめうだひろとも）／日本総合研究所調査部主任研究員 **池本美香**／
認定こども園 ゆうゆうのもり幼保園（神奈川県・私立）／仁慈保幼園（鳥取県・私立）

データ

乳幼児の父親についての調査

第2特集

生涯の学びを支える「非認知能力」をどう育てるか

白梅学園大学教授 **無藤 隆**

Webアンケートにご協力ください。
もれなく謝礼進呈
詳しくはP.1をご覧ください。

ベネッセ教育総合研究所 http://berd.benesse.jp/

これからの幼児教育 2016 春 Spring CONTENTS

2 第1特集

保育の質の向上につながる 保護者との関係のあり方を考える

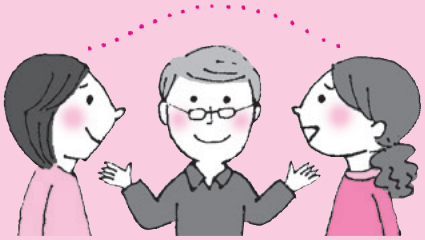
2 インタビュー
保護者と同じ目線で語り合う姿勢が ともに子どもを育てる関係性を育む
玉川大学教育学部 乳幼児発達学科教授 **大豆生田啓友**

6 事例1
保護者の多様な経験や能力が 保育に生かされ、 園の遊びや生活をより豊かに
認定こども園 ゆうゆうのもり幼保園（神奈川県・私立）

8 事例2
遊びの中で探求する子どもの姿を ドキュメンテーションにして発信。 子どもの興味を軸に家庭とつながる
仁慈保幼園（鳥取県・私立）

10 インタビュー
海外の先進事例を参考に 保護者の参画で保育の質向上を
日本総合研究所調査部主任研究員 **池本美香**

12 Q&A
保護者と良好な関係を築いて、 ともに子どもを育てるために



14 データから見る幼児教育

乳幼児の父親についての調査

18 第2特集

生涯の学びを支える「非認知能力」をどう育てるか

18 インタビュー
支援の「発想」を転換すれば日常の遊びや生活の中で十分に育つ
白梅学園大学教授 **無藤 隆**

「これからの幼児教育」ウェブサイトでは
全ての記事を無料でダウンロードできます

◎過去1年間の特集テーマ
2015年 夏号 子どもの未来につながる力を幼児期から育む
2015年 春号 明日の保育につながる振り返り
2014年 秋号 保育の質を高める遊びの「理解」と「援助」
※本誌は最新号、バックナンバー等の追加発送は行っておりません。

http://berd.benesse.jp/magazine/en/latest/ または ベネッセ　これからの幼児教育 で 検索

※ここでご紹介した内容、デザインなどは変更になる場合があります。

「これからの幼児教育」2016年春号
発行人／山元倫明　編集人／渡邊恵子　発行所／(株)ベネッセコーポレーション　印刷製本／凸版印刷(株)　編集協力／(有)ペンダコ　執筆協力／二宮良太
撮影協力／ヤマグチイッキ、田中秀和、荒川潤　イラスト協力／アサヌマリカ

◎お問い合わせ先／「これからの幼児教育」お問い合わせ窓口　〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング14F
0120-926-610（通話料無料）受付時間：9:00 ～ 18:00（土日・祝日・年末年始除く）
※番号をよくお確かめのうえ、おかけください。 ※上記番号に接続できない通信機器・回線の場合は、086-214-6301へおかけください（ただし通話料がかかります）。

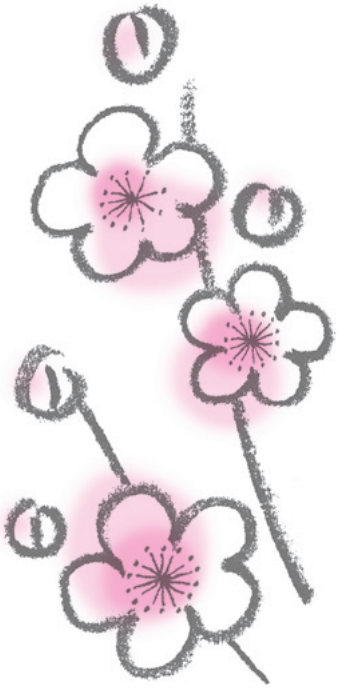
はじめに

2015年４月、「子ども・子育て支援新制度」がスタートしました。１年の成果を評価する時期にあたって変わったこと、変わらないこと、そして変わらなければいけないと実感したことなど、いろいろあるのではないでしょうか。

３月、４月は、卒園式、入園式、保護者会……と、保護者と接する機会が増える時期です。第１特集では、保護者とどんな関係を、どのようにつくっていくべきかを、「保育の質の向上」という観点から実践事例を交えて考えていきます。

第２特集では、中央教育審議会でも重視されている「非認知能力（社会情動的スキル）」を取り上げます。子どもが豊かに成長するために、園と家庭はどのようなパートナーシップのもと、連続性・一貫性のある保育を展開していけばよいのでしょうか。第１特集とあわせて園運営や保育のあり方を話し合う資料として活用していただければ幸いです。

『これからの幼児教育』編集長　荒川悦子



Webアンケートにてご意見・ご感想を募集しています（回答者全員に500円の図書カードの謝礼あり）。詳しくはHPをご覧ください。

ベネッセ　これからの幼児教育　園向け　検索

第1特集

保育の質の向上につながる保護者との関係のあり方を考える

園にとって、保護者が園運営の「パートナー」であるか、「サポーター」であるか、
それとも「サービスの利用者」にとどまるかは大きな違いです。
園運営のしやすさだけではなく、保育の質の向上にも大きな影響を及ぼすからです。
これからの時代に求められる園と保護者の関係のあり方を見つめ直してみましょう。

インタビュー

保護者と同じ目線で語り合う姿勢がともに子どもを育てる関係性を育む

保護者が保育や園行事に積極的に参加してくれるような関係性を育てるために
園は何から始めると良いのでしょうか。玉川大学教育学部の大豆生田先生が保護者との関係を見つめ直し
連携を深めるための具体的な方法を提示します。

保護者との関係を深めると子どもが幸せになる

子ども・子育て支援新制度がスタートし、園を取り巻く環境が大きく変わる中で、保護者との関係性を見つめ直す動きが広がっています。

とても良いことだと思います。保護者との関係を深めて保育が豊かになると、子どものためになりますし、保護者の園に対する満足度も高まるからです。そうした園では保護者が保育をよく理解し満足しており、園運営はとても円滑で、小さな苦情はあっても大きなトラブルはほとんど見られません。

他方では、近年、保育の低年齢化や長時間化が進み、「園に任せっ放し」という保護者も多く見られます。こうした状況で保護者との相互理解が不足すると、園と保護者は、「サービス」の提供者とその利用者という関係になりかねません。そうなると、保護者はことさらに便利さを追い求めたり、ささいなことがクレームにつながったりして、園として苦労が増えますし、子どもにとっての幸せや利益につながるとも思えなくなります。

「ともに子どもを育てましょう」というメッセージを発して保護者を巻き込んでいくか、それとも保育のサービス化を加速させていくか、今、園は大きな岐路に立たされていると言えます。

そもそも保護者は、園との深い関わりを望んでいるのか、という疑問もあるでしょう。確かに保護者は便利さを優先したり、面倒を避けたりする傾向はあります。しかし一方では、乳幼児期の子どものすばらしさを存分に楽しんだり、育児の苦楽を

玉川大学教育学部
乳幼児発達学科教授
大豆生田　啓友
おおまめうだ・ひろとも
◎専門は、乳幼児教育学・子育て支援。著書に『「子ども主体の協同的な学び」が生まれる保育』（学研）、『保育が見えるおたよりづくりガイド』（赤ちゃんとママ社）など。

共にする友だちをもったりしたいとも願っています。そうした願いを叶える「場」として、子ども理解を支えたり、保護者どうしの交流を促したり、園にしかできないことは多いでしょう。

子育て家庭が孤立化しやすい時代ですが、園が保護者の交流する場として機能すると、そこにはコミュニティが生まれます。卒園後も地域で暮らすわけですから、コミュニティは生き続けます。園はそうした可能性を秘めた場であることをぜひ意識してください。

保護者が園の「サポーター」になると園運営はとてもスムーズに

保護者との連携にはさまざまなレベルがありますが、まずは子どもの育ちを適切に伝え、保護者の声に耳を傾けて、保育のねらいが理解され、園に対する満足度が高まることを目指しましょう。いわば、保護者が園の「サポーター」となっている状態です。こうした関係性があると、保護者は協力的になり、園運営はとてもスムーズになります。

その先を見つめると、良好な関係をベースとして、園内に保護者が主体的に活動できる場を設けるという連携の形もあります。例えば、保護者が保育に入って絵本の読み聞かせをしたり、バザーなど行事を運営したり、サークル活動に参加したりすることが考えられます。こうした活動は、保護者との信頼関係の土台があって、はじめて可能になります。

関係性を深める出発点は子どもの成長を伝えること

それでは、園はどのように保護者との関係を深めていくと良いのでしょうか。

前提として、園の活動内容は保育者が考える以上に保護者から見えにくいとお考えください。園が、「ブラックボックス」のままでは、保護者に理解を求めることはできません。そこで適切な情報を発信することが、保護者と連携する出発点となります。

といっても、「今日は○○をしました」といった活動内容を伝えるだけでは不十分です。何も伝えないよりはもちろん良いのですが、保護者が本当に知りたいのは、「わが子はどう成長しているのか」であることを意識してください。

そこで「こんな場面で夢中になっていましたよ」といった具体的なエピソードを伝えると、保護者は「自分の子どもをよく見てくれている」と感じます。さらにエピソードを通して、「どのような学びや育ちがあったか」を説明すると、「ただ遊んでいるように見えるけれど、そんな意味があるのか」と保育に対する理解が深まり、園に対する満足感も高まります。

ここで重要なのは、保護者に発信できる情報は、当然ながら保育の質に左右されるということです。例えば、禁止事項ばかりだったり、一方的に「させる」だけの保育だったりしたら、遊びの中での学びや成長は見えません。この場合、保護者には「今日は○○をした」といった情報しか伝えられず、遊びの意味は理解してもらえないでしょう。

これは、言ってみれば保護者との信頼関係を築く土台です。保育者はプロフェッショナルであるからこそ、遊びの見通しをもち、その意味や学びの物語を適切に伝えることができるのです。

子どもの姿を伝えるのに必要なのは保育者の「感動」

子どもの姿を伝える際は、担任だけではなく、複数の保育者から声をかけると、保護者の園に対する信頼感はいっそう高まるでしょう。保育の質が高い園は、例外なく保育者たちが子どもの姿について語り合って

います。語り合う文化を通して、子ども理解や遊びの見通しなどが深まっていくのです。

しかし一方では、若手を中心に保護者対応に苦手意識をもつ保育者が増えています。確かに難しいのですが、まずはあまり構えすぎないことが大切です。

保護者対応の基本は、子どもの姿を通して自分が感じたうれしい発見を素直に表現することです。「○○ちゃん、この遊びのとき、とてもすてきな笑顔でしたよ」など、ポジティブなエピソードをたくさん伝えてください。これだけでも、保護者に伝わるものはとても大きいようです。

逆に保護者対応で最も避けたいのは、何も伝えないことです。保護者にとって、保育者が何を考えているかわからないことほど、不安な状況はありません。

「年齢の若い保育者の話はなかなか聞いてくれないのでは……」といった心配は無用です。保護者が気にするのは、保育者の経験年数や年齢ではなく、自分の子どもをしっかりと見てくれているかどうか、それが一番です。一生懸命に子どもの姿を伝えようとする誠実な気持ちは必ず理解され、信頼を得られるはずです。

ベテランの保育者も、子どもの姿を通してワクワクした気持ちを伝えることの大切さを忘れないでください。さらに経験を積むほど、感動した気持ちを学びに結びつけて考えられるようになるでしょう。それをエピソードとともに伝えれば、保護者の理解が得られやすいのは前述した通りです。

一見ネガティブな行為も成長のプロセスとして伝える

保護者に対して「伝えにくいこと」を伝えなくてはならない場面もあります。例えば、ある子どもが友だちを引っかいたり、かみついたりしたとき、みなさんは保護者にどう伝えるでしょうか。

「○○ちゃん、今日もお友だちを引っかいてしまいました」と事実を伝えるだけだと、保護者は「私の育て方が悪いのではないか」と悩み、家で子どもを厳しく叱ったりするかもしれません。

こうした場合は、子どもの発達段階を踏まえて丁寧に説明しましょう。例えば、「私がしっかりと見ていたら起きなかったと思います。ごめんなさい」と、まず、トラブルの責任は子どもにあるのでも、保護者にあるのでもなく、保育者としての自分にあることを前提にします。そのうえで、「今の時期にお友だちとトラブルが起こることには、こんな理由があります。だからそれも成長の証（あかし）なんです。しかも、がまんする力も伸びてきたので、これからは徐々に減っていくはずです」などとお話しすれば、保護者は、一見ネガティブな子どもの行為にも意味があることを理解してくれるでしょう。そして保育者が一緒になって自分の子どもの育ちを真剣に考えてくれていることに心強さを感じるに違いありません。

ドキュメンテーションで効率的に情報発信

情報発信は、連絡帳やおたより、またドキュメンテーションでも可能です。ドキュメンテーションとは、子どもの会話やエピソードの記述、写真などに保育者がコメントを添えるなどして発信する方法です。

例えば、ある園では、毎日のように保護者が目にする壁のパネルに当日の活動の写真とコメントを貼っています。写真は子どもの姿をわかりやすく伝えますし、それをきっかけに保護者とのやりとりが生まれることもあるでしょう。

情報発信の方法を検討する際は、なるべく保育者の負担を増やさない

ことも大切です。例えば、午睡の時間を使ったり、パソコン上のフォーマットに写真を置くだけで完成させたり、無理なく続けるために省力化の工夫をしましょう。

保育参加を通して、保護者に保育者の立場を体験をしてもらうのも、保育への理解を促す良い方法です。園内で子どもと一緒に過ごすと、日常の保育が具体的にイメージできますし、保育者の思いも伝わります。

保育参加で最も大切なことは、保護者自身に「保育ってこんなに楽しい」と実感してもらうことです。楽しさを実感することで、「遊びってこんなに大切なんだ」と保育の意義を理解することにつながる他、自分の子育てを見つめ直す機会にもなります。さらに、今後も園の取り組みに積極的に関わりたいと思い、園のサポーターにもなっていくのです。だからこそ、保護者が楽しかったと思えるような保育参加を目指したいものです。

信頼関係をベースに さらに一歩進んだ連携を

ここまで読んでくださったみなさんは、保護者との連携を深める基本的な流れを理解されたと思います。保育者と保護者が同じ目線で子どもについて語り合える関係をぜひ目指してください。

保護者は信頼関係が深まると、「子どものために、そして園のために」という思いから、日々の保育や行事などに対して協力的な姿勢を見せてくれるようになります。

例えば、ある園で子どもが草花を使った香水作りに夢中になっていました。すると、アロマテラピーに詳しい母親が自ら協力を申し出て、遊びがどんどん深まりました。

別の園では飼育するカエルがなかなかエサを食べてくれず、子どもたちが悩んでいました。そこでおたよりを通して保護者にヘルプを求めると、情報が寄せられたり、子どもにエサを持たせてくれたりして、問題が解決したそうです。

これまで日本の園は、保育を自園の中で完結させようとする傾向がありました。その意味では、閉鎖的だったと言えるでしょう。しかし、園だけでできることは限られていますから、遊びや生活の経験を豊かにするためにも、保護者や地域の力をもっと借りても良いのではないでしょうか。保護者はいわば、様々な特技や趣味や職能を持った存在ですから、社会的資源として活用しないのはもったいないと言えるでしょう。

保護者との関係性が深まっている園では、ぜひ協力を呼びかけてみてください。その際は、強制や義務ではなく、「子どもたちがいま、○○に興味を持っています。○○について情報をお持ちの方、手伝ってくださる方いませんか？」などと募集する「この指止まれ」方式にすることが、保護者のやる気を引き出すポイントです。

園内に積極的に入り込んでもらうために、サークル活動の導入も考えられるでしょう。こうした活動を始めると、最初は遠慮する保護者が多いのですが、実際に参加すると大半は「やって良かった」というううれしい感想を述べてくれます。

保護者がなかなか集まりづらい保育所では、例えば、月1回、お迎え時にクラスの枠を越えてお茶を飲みながらおしゃべりをする場を設けるなどの方法もあります。なかには、保育者や他の保護者と深く関わるのを苦手とするかたもいますが、それはそれでいいと思います。「参加したくなったら、いつでも参加できる」という雰囲気があると、保護者は気持ちが楽になるはずです。

保護者の思いや考え方は人それぞれです。あくまでも一人ひとりの保護者との一対一の関係を大切にする気持ちが、保護者との連携の支えになることを忘れないでほしいと思います。

事例 1

保護者の多様な経験や能力が保育に生かされ、園の遊びや生活をより豊かに

認定こども園　ゆうゆうのもり幼保園（神奈川県・私立）

保護者はさまざまな経験や能力をもっています。ゆうゆうのもり幼保園では、保護者の発想を生かし、保育者とは異なる視点から保育を豊かにすることを心がけてきました。そのベースにあるのは、保護者が居心地の良さを感じ、楽しく園運営に参加できるようにする環境づくりです。

保護者の理解と協力がなくては、理想の保育の実現は不可能

日常の保育の中に保護者の姿が自然と溶け込む

保護者が読み聞かせや絵本の貸し出し手続きをしたり、お迎えに来た保護者が園庭で子どもたちに囲まれて遊んでいたり――。ゆうゆうのもり幼保園では、保護者が日常の保育に自然と溶け込む姿がとても印象的です。2005年の開園以来、保護者との連携を大切にしてきた園長の渡邉英則先生は、次のように方針を語ります。

「本園は、子どもが思う存分に遊んだり、豊かな生活経験を積んだりする中で、自分らしさを発揮できることを最も大切にしています。そうした保育は、保護者の理解と協力があってこそ実現が可能です」

行事の際には保護者の意欲的な参加が見られるほか、おやじの会などの活動では「こんな体験をさせると喜びそう」「こんな遊具を作りましょう」など、保育者にはない視点から保育を豊かにする提案を受けることが多くあります。例えば、屋内に可動式の滑り台を設置したり、夏に流しそうめんをしたり、芋掘りのあとに保護者がドラム缶で作製したお芋焼き器で焼き芋を作ったりと、保護者の発案による活動は数えきれません。

認定こども園
ゆうゆうのもり幼保園
理事長
幼稚園部門園長
渡邉　英則先生

「多様な経験や能力をもつ保護者が集まっていますから、そのアイディアや力を保育に生かさない手はありません」と、渡邉先生は話します。

園では、保護者が運営に参加しやすくするしくみをととのえています。全保護者を対象とした「父母の会」のほか、「おはなしのもり（読み聞かせや絵本の貸し出し）」や「あみちく（編み物などの制作）」（写真１参照）といったサークル活動を設けています。さらに父親の参加を促すために始めた「おやじの会」も活発に活動しています。そのほか、新聞作り、ホームページ制作、お別れ

写真1●「あみちくサークル」の活動風景。「雑談が気晴らしになる」「バザーでの出品で喜ばれるのがうれしい」といった声が聞かれました。

会の企画といった委員会活動でも、保護者の力を借りています。

「自分も参加したい」と自然に集まりたくなる場づくり

多くの保護者は入園の時点から園運営に参加する気持ちをもっているのでしょうか。

「入園説明会では、園の方針とともに、保護者の協力で保育が成り立っていることを強調しますから、ある程度は理解して入園されます。それでも、最初から全員が積極的なわけではありません。そこで強制ではなく、みんなが楽しそうに活動するのを見て『自分も参加したい』と集まりたくなる場をつくることを心がけています」（渡邉先生）

例えば、園舎の一室を開放して保護者ルームとし、サークル活動をはじめ各種の集まりが活発になるように促しています。

保護者が気持ち良く参加できるように保護者どうしの関係性にも配慮しています。

「保護者の参加はプラス面が大きいのですが、保護者間の対立などのトラブルもまれに起こります。特に認定こども園は、就労・非就労という保護者の立場の違いが問題の原因になる場合があります」（渡邉先生）

そこでバザーなどの企画・運営では、夕方や土曜日にも話し合いの時間を設けるなど、就労の保護者の参加を促し、「一部の保護者だけで決めない」ことを大切にしています。

「本園は保護者の就労・非就労でクラスを分けていませんから、子どもからすると『お迎えの時間が少し違う』程度の認識です。そうした子どもの姿を話し、ふだんから『ゆうゆうのもり幼保園として、みんなで力を合わせましょう』と呼びかけていることも、保護者の団結を促す心がけです」（渡邉先生）

園運営への参加を促すことが「子育て支援」になる

保護者が居心地の良さを感じられる場づくりに力を注ぐのは、それが「子育て支援」につながっているからでもあります。

保護者の活動を通して、子育ての喜びや悩みを分かち合える友人ができるケースはとても多く見られます。特にこうした活動は、年齢の異なる子どもの保護者が集まるため、ある保護者の悩みに対し、「うちの子も少し前はそうだった。きっと大丈夫よ」などといった助言が聞かれることが多くあります。そのように「横」だけではなく、「縦」の関係ができることは、保護者が少し長い目で育児を見つめる気持ちの余裕につながっていると思います。

さらに保護者は園の活動に参加することで、自分の子どもについて、保育者との関係、他の子どもとの関係など、いろいろな関係性を通して見つめ直すことができます。家庭とは異なる子どもの姿を見ることで、子ども理解が深まり、親としての成長が促されます。

「親が子どものことを理解するのは、子どもにとっても非常に幸せなことです。親どうしの関係性づくりも大切な『子育て支援』であるという気持ちで、保護者が気持ち良く集まれる環境をととのえています」（渡邉先生）

写真2● おやじの会で建てたログハウス。おやじの会のモットーは「できる人が、できる時に、できることを」。子どもの笑顔のために、保護者自身が楽しむことを大切にしています。

保護者の参加は、現場の保育者にも好影響をもたらしています。

「保護者に対して保育をオープンにするとごまかしはききませんから、プレッシャーがあるのは事実。ときには苦言もいただきます。しかし丁寧に子どもに向き合う姿が理解されると温かい関係が育まれ、それが保育者には得がたいやりがいとなります」（渡邉先生）

保護者が園運営に参加するしくみをととのえるだけではなく、常に保育の質の向上を図り、それが理解されるように日頃のコミュニケーションを大切にする。そうした努力を続け、保護者、保育者、そして何より子どもと、みんなが喜びを感じられる関係性を築いていることが豊かな保育の実践を支えています。

認定こども園　ゆうゆうのもり幼保園

◎2005（平成17）年、横浜市「よこはま子育て支援計画」などの構想に基づいて開園。「子どもが子どもらしく育つこと」を第一とする保育を実践する。

理事長・幼稚園部門園長　渡邉英則先生
所在地　神奈川県横浜市都筑区早渕2-3-77
園児数　208人（0～5歳）

事例２

遊びの中で探求する子どもの姿をドキュメンテーションにして発信。子どもの興味を軸に家庭とつながる

仁慈保幼園（鳥取県・私立）

仁慈保幼園は過去に保育の方針を転換した際、なかなか理解が得られなかった反省点から、保護者への日常的な情報提供に注力しています。その中心となるドキュメンテーションでは、遊びの「プロセス」を重視した情報を毎日発信することで、保護者との対話を生み出しています。

情報発信や対話が保護者との連携のベースになる

1年間をかけて保育のねらいを伝えた

仁慈保幼園が保護者との連携を強く意識し始めたのは、2001年、妹尾正教先生が園長（現在は理事長）に就任して保育の方針を大きく変えたことがきっかけでした。

「一斉保育から、一人ひとりの子どもの主体性と協同性をより重視する保育に転換しました。それまで以上に子どもの育ちを促せるという信念がありましたし、保護者との関係は良好でしたから、すぐにねらいを理解して協力してもらえると考えていましたが、それは間違いでした」（妹尾先生）

それまでも保育観について発信してきたつもりでしたが、保護者側には十分に伝わっていなかったことに初めて気づいたと言います。

「『今まではこういう保育をしていましたが……』と話しても、『どういう保育ですか？』と、全然通じていなかったのです。子どもの姿や行事を通して理解されていると、こちら側が勝手に考えていただけでした。保育観がバラバラでしたから、今後の方針を理解し合うのは容易ではありませんでした」（妹尾先生）

さらに一斉保育に比べて、「どのような学びや成長があるか」が見えにくいことにも反発を招きました。妹尾先生は保護者会などで、遊びや生活の中に学びがあることを繰り返し発信しましたが、言葉だけでは伝わりづらく、「遊んでいるだけではないのか」といった声が根強くありました。子どもどうしの学び合いや支え合いを促すため、３～５歳は縦割りクラスを編成しましたが、その意義も理解されづらかったと言います。

結局、保護者が園の方針に納得したのは、１年ほど経ってからのことです。保護者が子どもの変化や成長を感じたことが大きな要因でした。

「指示待ちの傾向が強かった子どもたちが、自らの興味・関心にしたがって多様な遊びを展開するようになりました。帰宅してからも、その日の遊びの内容や翌日にやりたいことを親にいきいきと話すようになり、次第に保護者に遊びの意味が伝わっていきました」（妹尾先生）

仁慈保幼園
理事長
妹尾　正教先生

ドキュメンテーションをもとに保育者と保護者の対話を生み出す

以後、保護者に対して保育観を十分に伝えていなかったことの反省から、情報発信にも工夫を凝らすようになりました。とりわけ力を注いでいるのが、３歳以上の担任が毎日クラスごとに作成するドキュメンテーションです（９ページ中央上写真参照）。

ドキュメンテーションは、保育中にデジカメで撮影した写真に子ども

の言葉やコメントを添えたものです。ＰＣの編集ソフトを利用して、午睡の時間に30分ほどかけて作成し、お迎え時に保育室の入り口に掲示します。特に重視するのは、「プロセス」を伝えることです。

「『今日は○○をしました』といった遊びの内容や結果だけではなく、どういう疑問や発想から探求が発生し、どのように展開したかといったプロセスを可視化することを大切にしています。プロセスの質を高めることが、保育の質の向上につながると考えているからです」（妹尾先生）

３歳未満は個の発達の側面が強いため、月１回、担任が一人ひとりの子どものドキュメンテーションを作成します。さらに３歳未満は、３カ月に１回、保護者が自由なフォーマットで家庭版のドキュメンテーションを作成して園に提出するという取り組みもしています。

「家庭での姿を伝えてもらい、保育者と共有するのがねらいです。保護者にも、子どもの育ちのプロセスを注意深く見つめてもらいたいという願いも込めています」（妹尾先生）

ドキュメンテーションは、情報発信の手段であると同時に、「対話」を生み出す、コミュニティ形成を促す機能をもつといいます。

「ドキュメンテーションで伝えられることは、ほんの一部に過ぎません。しかし、その内容をもとに、保育者と保護者が、また保護者どうし、子どもどうしが語り合うきっかけとなっていることに大きな意味があります」（妹尾先生）

お迎えの時間には、保育者や保護者がドキュメンテーションを前に、

写真●保護者が送迎時に必ず通る廊下に掲示しています。日を追って探求がどう変化したかを伝えることも重視しており、毎日楽しみにしている保護者は少なくありません。他のクラスのドキュメンテーションを眺める姿も見られます。

「今日はこんなことがありました」「○○ちゃんの表情がすてきですね」などと会話する姿が、日常的な光景となっています。保育者は、遊びを通して探求するプロセスを見取ることを心がける中で、子どもの心の動きを観察したり、遊びを見通したりする力を高めていきます。一方、保護者は、具体的なエピソードを通し、子どもが遊びの中でどのように成長しているのかを、保育者の専門性を通して実感的に理解します。

「保護者が困っていることを突き詰めると、『子どもをどう理解すれば良いのか』ということだと思います。保護者との連携を考えるうえでは、その点をサポートすることを最も大切にしています」（妹尾先生）

ドキュメンテーションなどを通して保育への理解が深まるに伴い、保護者が園の保育に自然な形で協力する姿が見られるようになりました。

例えば、子どもたちが「塩」を作ろうと、園の近くにある「中海」の汽水を煮詰めると、黄色っぽい塩ができました。なぜ白い塩が出来なかったのか、子どもたちは理由を話し合い、「中海の水だからだ。日本海の水なら白い塩ができるかもしれない」という仮説を出しました。日本海まで徒歩では遠いため困っていると、それを知った複数の保護者が親子で車に乗って、日本海まで海水を汲みに行ってくれたそうです。

「子どもの興味は、園と家庭で連続したものであってほしいと願っています。園で生じた興味に沿って、家庭で遊びや生活が展開すると探求は深まります。逆に家庭での経験を園の保育にもち込むこともあります」（妹尾先生）

そうした考えから、ふだんから子どもの興味を軸として、園と家庭の遊びや生活を結びつけることを大切にしています。それが可能なのは、ドキュメンテーションなどを通した情報発信や対話による相互理解という「コミュニティ」が土台にあるからなのでしょう。

仁慈保幼園

◎1927（昭和２）年に開設。「昼間の家族を目指して、それぞれに、そして、一緒に」という保育方針のもと、子どもの主体性と協同性を重視した保育を実践。

理事長　妹尾正教先生
所在地　鳥取県米子市東町456
園児数　140人（0～5歳）

インタビュー

海外の先進事例を参考に 保護者の参画で保育の質向上を

園と保護者との関係性について海外に目を向けると、日本とは大きく異なる状況が見えてきます。
保護者の参画が保育の質を向上させる重要な手法と見なされている海外との比較を通し、
日本の園の現状や今後望まれる取り組みついて、
日本総合研究所調査部主任研究員の池本美香氏が解説します。

量的拡大だけではなく 質の向上にも注目する必要性

保護者の参画について 12 カ国を調べましたが、海外と日本の園を比較すると、保護者との向き合い方がかなり異なります。日本では、保護者は保育者と対等というより、「支援」を必要とする弱い存在と捉える傾向があります。一方、海外では保護者はパートナーであり、園運営への保護者の参画は保育の質向上に欠かせないという考え方です。

どうして、こうした違いが生じているのでしょうか。海外では、国連の「子どもの権利条約」に基づき、すべての子どもにふさわしい教育や発達の機会を与えることが強く意識されています。そのため、園には子どもの考えを尊重して反映させる姿勢があり、まだ意見が言えない小さい子どもの代弁者として保護者の意見が重視されているのです。日本もこの条約を批准していますが、残念ながらこうした子どもの権利の視点からの議論はほとんど聞きません。

さらに保育には公的資金が注入されるため、その質が保障されることを求めるのは市民の当然の権利と考えられています。行政は保育の質を高めるために、保護者に保育の質をチェックする役割を期待しており、気になることや困ったことは所定の窓口に知らせるように周知しています。問題があっても遠慮して伝えられなかったり、どこに相談して良いのかすらわからなかったりする日本の状況とは大違いです。

現在日本では、待機児童問題の解消に向けて保育の量的拡大ばかりが注目され、質にかかわる議論はおざなりだと言わざるをえません。「子ども・子育て支援新制度」をめぐる議論の中である程度は検討されましたが、職員配置基準や保育士の処遇、園庭の有無などが論点で、海外では保育の質向上のための重要な要素と考えられている「保護者の参画」については議論されませんでした。

国によって保育をめぐる事情は異なりますが、日本においても子どもの代弁者である保護者の声は、保育の質を改善するうえで貴重な材料となるに違いありません。特に今後は、財源の制約が厳しくなり、保育士不足も進む中で、保育の質を保障し、保護者や子どもの満足度を高めるためには、保護者の参画が欠かせないと考えられます。日本でも保護者の参画をめぐる議論が活発化することを強く望んでいます。

日本総合研究所調査部主任研究員
池本 美香
いけもと・みか

◎社会保障制度などを専門に研究。著書に、保育の質を高めるために保護者の力を活用する 12 カ国の政策動向を紹介する『親が参画する保育をつくる』、編著書に『子どもの放課後を考える』（共に勁草書房）など。

保護者を巻き込むことは 保育者の能力のひとつと考えて

海外では、保護者の参画を義務としたり、あるいは権利として保障したり、法的な根拠に基づいて保護者参画のしくみがととのえられています。さらに、日本の幼稚園教育要領

や保育所保育指針にあたるものが、国民に向けてわかりやすく説明されているなど、日本と比べて、保護者が保育についてよくわかっているようです。保育に関する知識があるからこそ、参画への気持ちが起こりやすい面もあるように思います。

このように保護者参画を促すうえでは行政の役割が大きいのですが、海外の実践の中には日本の園が独自に導入できる取り組みも少なくありません。

例えば、海外では保護者の代表者と保育者が意見を交わすパブリックな会議の設置が義務づけられている国があります。保育者が保育の方針を伝えたり、保護者が運営へのアイディアを出したりして、共通理解を深めていくのがねらいです。日本の園でも、こうした場を設けるのは難しくないと思います。保護者は自分たちの意見を聞いてくれる機会があれば、園のためにいろいろと考えて提案するでしょうし、園の事情を理解するにつれて協力を申し出ることも増えていく可能性があります。

日本のＰＴＡや父母会は一見似ていますが、これらはあくまで任意団体であり、施設運営について対等に意見を言うことが法的に保障された場ではないのが大きな違いです。

もう少し緩やかな場として、お迎えの時間に「親の夕べ」と称して保護者どうしお茶を飲みながら歓談する時間を設けているデンマークの例がありました。このとき、保護者たちは保護者の代表者に園への意見などを伝えます。後日、代表者は他の保護者の意見をまとめて運営委員会で園に伝えるというしくみです。

保護者が園内にいつでも自由に立ち入ることができるのも、海外では当然の権利として認められており、園内に保護者専用のスペースが設けられている例もあります。

園にゆっくりと滞在してわが子が友だちと一緒に過ごす姿を見たり、保育者と子育てについて語り合ったりすることは、保護者にとって安心、楽しさ、自信につながります。そうした保護者が集まれば、地域のコミュニティは豊かになります。保護者や地域を育てることも、園の大切な役割と認識されているのです。

逆に日本では、送迎時などは安全管理上の理由からすぐに退出を求められることがあります。幼稚園と保育所で事情は異なりますが、もう少し保護者が園内で自由に滞在できる環境があっても良いと思います。

保護者への情報発信についても考えてみましょう。以前、子どもの通う園に私が、文部科学省が出している「幼児期運動指針」の内容をなぜ保護者に周知しないかを質問したところ、「『やらなければいけない』と負担に感じる保護者がいるので、あえて伝えていない」とのことでした。日本では、一律に全員が何かをしたり、させようとしたりする意識が強過ぎると感じます。その裏返しとして有益な情報まで遮断してしまうと、保育の質向上に保護者が力を発揮できません。

海外では、全員ができないのは当たり前という前提があり、行政や園は「できる人はやりましょう」というメッセージを発しています。例えば、園環境の修繕や清掃に保護者の力を借りたいとしましょう。「参加できない人が後ろめたさを感じるので協力を求めない」のではなく、「参加できる人だけが集まって少しでも力になってもらう」と発想する方が、保育の質向上に結びつきやすいと思います。

これまで保育者は、「すべてを自分たちでやらなくてはならない」「保護者に負担をかけてはいけない」という思い込みが強かったように思います。むしろ保護者などの外部の力を上手に借りることも保育者の大切な能力のひとつと捉えることで、保育は豊かになり、保育者の負担は軽減され、何より子どもや保護者に大きなプラスがもたらされます。発想さえ転換すれば、すぐにでも協力してもらえる心強いパートナーが身近にいることをぜひ忘れないでいただきたいと思います。

保護者と良好な関係を築いて、ともに子どもを育てるために

保護者との連携を深めるために、まずは一緒に子どもを育てる良好な関係性を築きましょう。現場の保育者が抱きやすい悩みに対して、３名の先生がたがお答えします。

Q1 いわゆるモンスター・ペアレントが増えているような気がします。何が原因なのでしょうか。

A1 保護者に原因を探すだけでなく、園の情報発信のあり方を見直す

●玉川大学教育学部 教授 大豆生田 啓友先生

いろいろな原因が考えられますが、まず、モンスター・ペアレントをつくり出してしまう要因が園に隠されている場合もあることを知っておいていただきたいです。一般に保護者から園の保育は見えづらく、きちんと情報を提供しないと不安や不満が募りやすくなります。例えば、子どもが切り傷や擦り傷をつけて帰ってきたのに理由が丁寧に説明されなければ、「何があったのだろう」と心配になるのは当たり前でしょう。そのように保育のねらいや実態を十分に伝えない状況で、保護者に対して「家ではこうしてください」といった要求ばかりしていると、「きちんと保育料を払って子どもを預けているのに、どうしてお願いばかりされないといけないのか」といった反発が起こりやすくなります。「この保護者はモンスター・ペアレントではないか」と思ったら、まずは園や保育を理解してもらうための情報を十分に提供しているかどうかを振り返ってください。

Q2 保護者が園の活動に参加すると、保護者間で派閥ができたり、トラブルが起こったりしないか心配です。

A2 保育者がコーディネーターになり保護者が熱中できるテーマを設定する

●玉川大学教育学部 教授 大豆生田 啓友先生

大勢の人が集まるのですから、当然、トラブルが起こる可能性はあります。保護者との連携がうまくいっている園ではそれを未然に防ぐために、主任クラス以上の保育者が保護者たちのファシリテーターやコーディネーターの役割を担い、良好な関係が保たれるように努力しているケースが多いようです。これは子どもでも同じですが、「みんなが熱中できること」が中心にあると人間関係は自然と良くなり、逆に退屈や不満を感じる状況ではトラブルが起こりやすくなります。保護者たちがワクワクすることに向かえるような場づくりを心がけてください。

Q3 保護者に自然な形で保育に参加してもらうためには、どのように働きかけるのが望ましいでしょうか。

A3 園から一律のお願いではなく、保護者からも申し出いただける関係づくり

●仁慈保幼園 理事長 妹尾 正教先生

保護者によって家庭や仕事の事情が違いますから、できることは異なりますし、園に望む距離感もさまざまです。園から一律にお願いをすると負担に感じる保護者が必ずいますから、できるだけ各人が望む関わり方ができるように心がけています。その点、ふだんから保育内容について丁寧に伝えていると、「○○を子どもたちに教えたい」「○○をもっているので使わないか」などと、保護者から協力を申し出てくれることがあります。そういうときは、明らかに保育の方向性から外れる場合を除き、ありがたく受け入れています。自然な形で保護者が参加できる状態をつくることが理想と考えています。

回答者

玉川大学教育学部
教授
大豆生田 啓友先生

仁慈保幼園
理事長
妹尾 正教先生

ゆうゆうのもり幼保園
理事長・幼稚園部門園長
渡邉 英則先生

Q4 毎日、保護者に対して情報を発信するのは、時間的にも労力的にも大きな負担ではないでしょうか。

A4 日々の業務を精選したうえで負担のない情報発信の方法を模索

●仁慈保幼園 理事長 妹尾 正教先生

多忙な園の現場では、確かに情報発信は負担となり得ます。仕事を取捨選択する意識がないと、ますます多忙化してしまいかねません。一つひとつの仕事について「本当に意味があるか」を検討し、不要な仕事は思いきってやめることも必要でしょう。私の園ではそうした検討を行った上で、毎日、ドキュメンテーションを通して保護者に情報を発信しています。子どもの姿について保護者に丁寧に伝えることは保育に欠かせませんし、ドキュメンテーションの作成を通して保育者の資質・能力の向上ももたらされるからです。その一方では、できるだけ操作性がシンプルな編集ソフトを利用するなど省力化の工夫もしています。

Q5 保護者どうしのトラブルが実際に発生してしまった場合、園はどのようにサポートすると良いのでしょうか。

A5 保護者どうしのトラブルには速やかに保育者が介入する

●ゆうゆうのもり幼保園 理事長・幼稚園部門園長 渡邉 英則先生

基本的に保護者どうしではトラブルは解決できないと考え、迅速に介入するように心がけています。担任や主任が対応することもありますし、深刻な状況なら園長の私が出て行く場合もあります。その際、双方の言い分をよく聞くという姿勢を伝えることを大事にしています。また、園の中心には子どもが存在し、大人は子どものために協力し合って動いていることを考えるように促すと、保護者も協力しなければという気持ちになりやすいようです。

Q6 父親にはどのように参加してもらうと良いのでしょうか。

A6 父親ならではの視点を遊びや環境づくりに生かしてもらう

●ゆうゆうのもり幼保園 理事長・幼稚園部門園長 渡邉 英則先生

うちの園では開園当初から「おやじの会」として活動しています。父親は行事などで園を訪れても他の保護者と打ち解けるのに時間がかかるのですが、おやじの会のような父親主体の活動があると積極的に動いてくれるかたが少なくありません。母親とは異なる視点で保育を見守ってくれることが多く、園内で子どもが小さなケガをしたことが問題視されたときには、おやじの会のメンバーが中心になって「それは仕方のないことだ。これまでの保育を変えないでほしい」とサポートしてくれました。またユニークな視点から遊びや環境づくりを提案してくれるなど、園の運営に欠かせない存在です。

乳幼児の父親についての調査

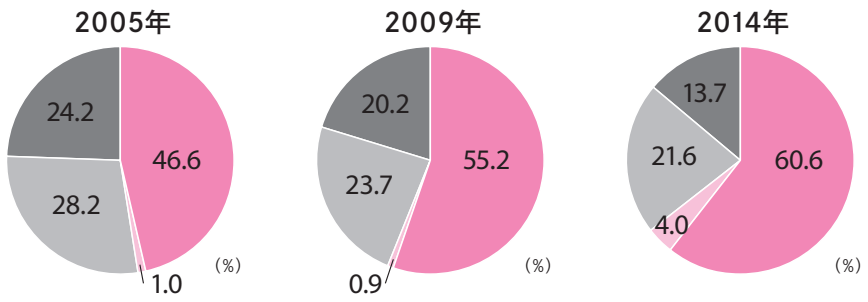
ベネッセ教育総合研究所では、0歳から6歳（就学前）までの子どもを持つ父親を対象に、子どもと関わる様子、家族との関係、仕事と家庭のバランスなど、乳幼児を持つ父親の家庭生活の実態や子どもや家族に対する意識を捉えることを目的にアンケート調査を実施しました。この調査は、2005年8月、2009年8月にも実施しており、今回は3回目になります。

引用・転載時のお願い 本調査の結果を引用・転載される際には、調査名称を記載してください〈例：ベネッセ教育総合研究所「第3回 乳幼児の父親についての調査」（2014）〉。

出産への立ち会いは経年で増加し、2014年には6割を超えた

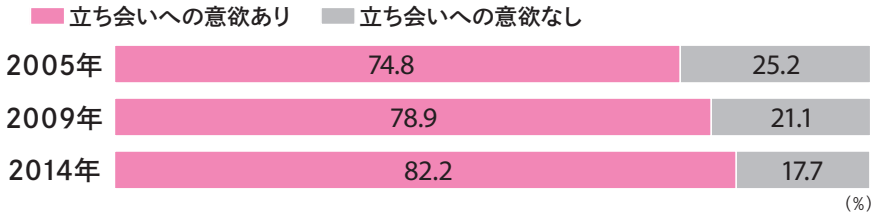
Q あなたは親として子どもの出産に立ち会いましたか。

図1 立ち会い出産をしたか（経年比較）



※今回、対象となる子どもにかかわらず、立ち会い出産をした%。
※経年比較のため、45歳以下の父親のみ。

図2 立ち会い出産への意欲（経年比較）



※立ち会いへの意欲ありは、図1の「した」「したかったけれどできなかった」を合計した数値。立ち会いへの意欲なしは、「したくなかったけれどした」「しようと思わなかったし、しなかった」を合計した数値。
※経年比較のため、45歳以下の父親のみ。

研究員解説 父親が出産に立ち会った割合は、2005年から2014年の9年間で17ポイント増加しました（図1参照）。2014年では、64.6%の父親が立ち会い出産を行い、過半数を超えています。また、出産立ち会いへの意欲（「した」「したかったけれどできなかった」の合計）をみると、2014年は約8割をしめており、出産の立ち会いに意欲的な父親の様子がうかがえます（図2参照）。

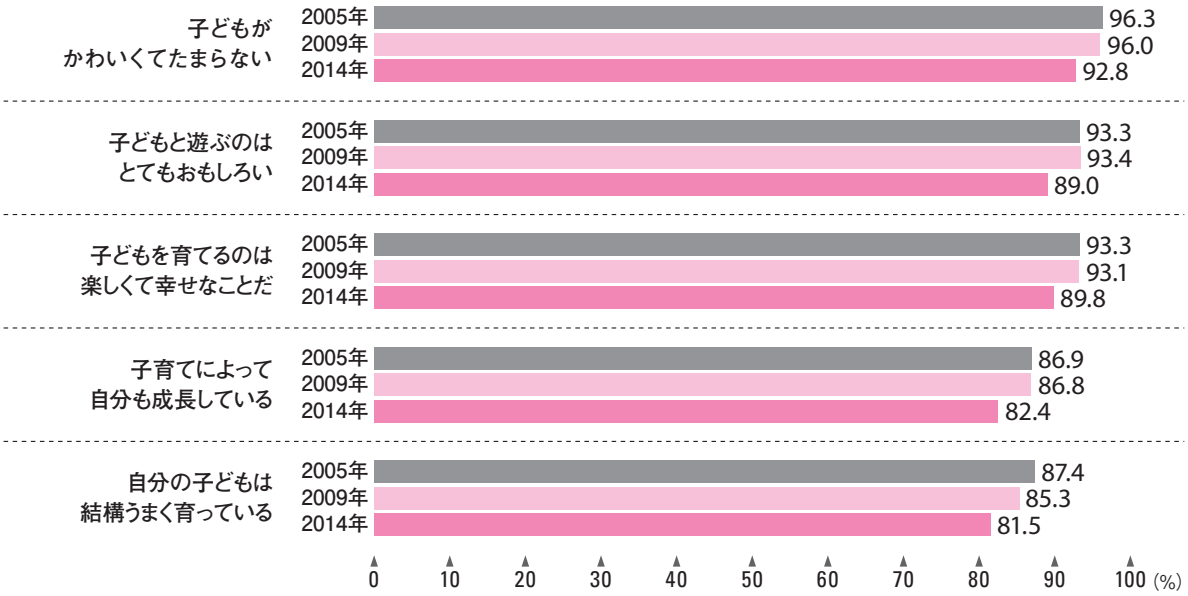
一方で、「子どもの出産時には休みをとりやすいか」という質問で「あてはまる」と回答した父親の方が、出産に立ち会う比率が高い傾向がみられます。立ち会う意欲はあっても、実際に立ち会えるかどうかは、本人や家族の意識だけではなく、職場環境なども関係していることがうかがえます（添付図なし）。

高岡純子◎ベネッセ教育総合研究所 次世代育成研究室 室長。妊娠・出産や子育てなど就学前の家庭を対象とする調査研究に携わる。

子どもとの接し方に
自信がもてない父親が増える傾向に

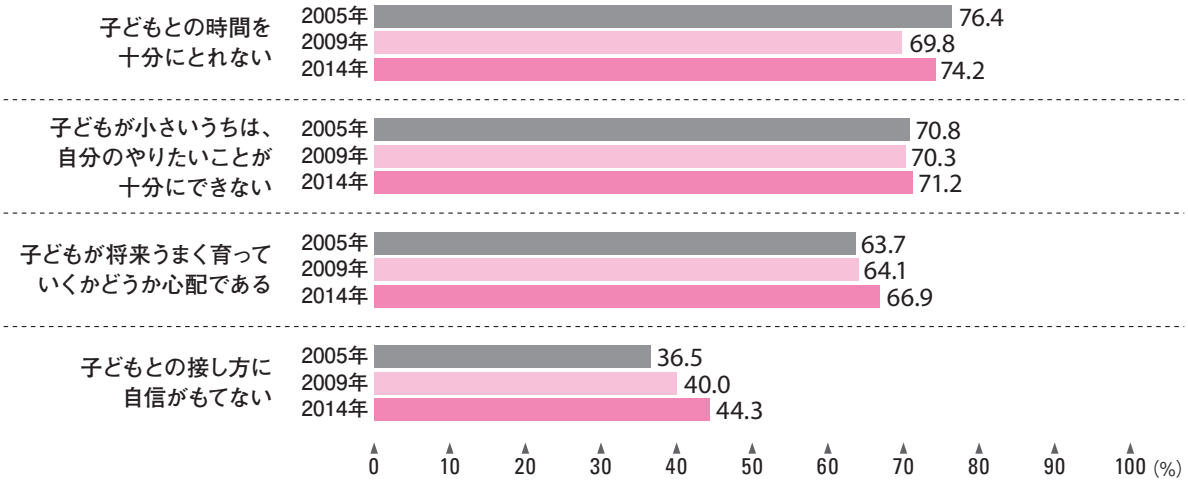
Q あなたは、最近次のようなことをお感じになることがありますか。

図3 父親の子育て意識〈肯定的な感情〉（経年比較）



※「よくある」+「ときどきある」の%。
※経年比較のため、45歳以下の父親のみ。

図4 父親の子育て意識〈否定的な感情〉（経年比較）



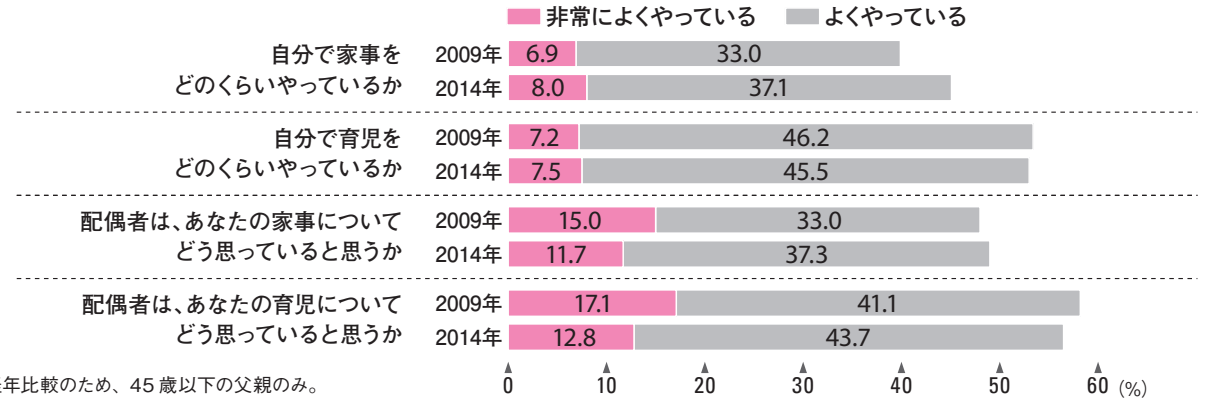
※「よくある」+「ときどきある」の%。
※経年比較のため、45歳以下の父親のみ。

研究員解説 父親の子育て意識について、子育ての肯定的な感情（子どもを育てるのは楽しくて幸せなことだ、子育てによって自分も成長している等）と否定的な感情（子どもが将来うまく育っていくかどうか心配である、子どもとの接し方に自信がもてない等）について聞いています。全体的には9年間で父親の意識には大きな変化は見られないものの、子育てに対して肯定的な感情では、5つの項目すべてでわずかながら減る傾向がみられました。特に「自分の子どもは結構うまく育っている」はもっとも下がっており、子どもの育ちについて慎重に捉えている様子がうかがえます（図3参照）。一方、否定的な感情はわずかに増える傾向がみられました。特に「子どもとの接し方に自信がもてない」割合が増加しており、父親として子育てへの関わり方に戸惑う様子がうかがえます（図4参照）。

父親の家事への自己評価は上昇傾向に

Q あなたやあなたの配偶者に関して、該当するものをお選びください。

図5 家事・育児の自己評価　配偶者が自分をどう評価していると思うか（経年比較）

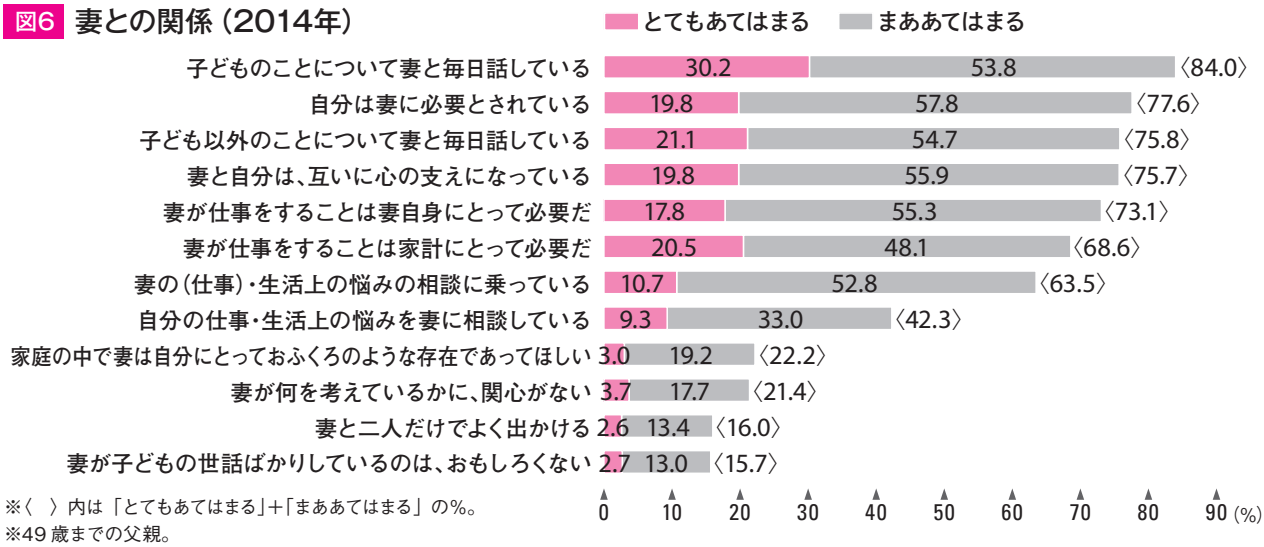


※経年比較のため、45歳以下の父親のみ。

父親の8割以上が毎日子どもについて妻と会話

Q 配偶者との関係についておうかがいします。

図6 妻との関係（2014年）



※〈　〉内は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。
※49歳までの父親。

研究員解説

図5は、父親の家事・育児に対する自己評価と配偶者がどう自分を評価していると思うかについてうかがったものです。父親の家事への自己評価は増加しています。実際の家事への関わりでも、増加している項目がみられます（「食事の後片付けをする」「ごみを出す」添付図なし）。一方、育児への実際の関わりは全体的に減少していますが、自己評価は変わりませんでした。

図6は配偶者との関係を聞いたものです。子どものことや子ども以外のことについて、妻と毎日話している数値が7割以上を占めており、妻とのコミュニケーションをよくとっている様子がうかがえます。一方で、「自分は妻に必要とされている」は、割合としては高いものの、9年間では減少している傾向がみられます（経年比較図なし）。

出典：**第３回　乳幼児の父親についての調査**
調査対象：0歳～６歳（就学前）の子どもをもつ父親　2,645名（20～49歳）
調査時期：2014年
調査地域：首都圏
調査方法：インターネット調査
調査項目：子どもや妻との関わり、家事・育児への関わり、仕事と家庭のバランス、育児観や将来への期待など

詳しい調査結果はこちらからご覧になれます。ぜひご活用ください。
▶ http://berd.benesse.jp/

調査データを踏まえ、園ができる支援について考える

保育者の支援のもと、父親に子どもを受け入れ、育ちを楽しむ体験を

今回の調査から、乳幼児をもつ父親が子育てをどのように受け止め、家事や育児にどう関わっているか、その一端が明らかになりました。これを踏まえて、園はそれぞれの家庭をどのように支援することが求められるのでしょうか。今回の調査の監修者のひとりである白梅学園大学の福丸由佳先生にうかがいました。

白梅学園大学子ども学部教授

福丸 由佳

ふくまる・ゆか

専門分野は家族心理学、臨床心理学。「仕事と家庭の多重役割」「家族支援」などが現在の研究テーマ。

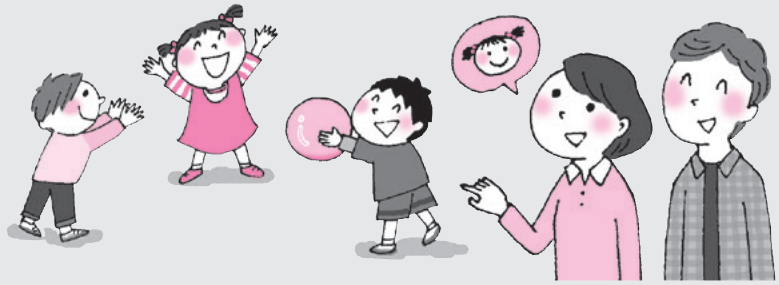
子育てに参加するからこそ父親も不安を抱く

夫の立ち会い出産について、この９年間で、立ち会い出産を「しようと思わなかった」という割合がかなり減っています(P.14図１参照)。「出産に立ち会うことで、自分も妻と一緒に親になるスタートラインに立ちたい」という父親が増えているのかもしれませんね。

ただ、立ち会い出産を「したかったけれどできなかった」という人が相変わらず多いのも事実です。理由のひとつには、職場で立ち会い出産を経験した先輩がまだそれほど多くないということがあるかもしれません。育休取得を含めて、職場にモデルがいるかどうかは、男性にとっては特に重要な課題のような気がします。

また、子育てに対する肯定感がわずかに減っている傾向が見て取れますが（P.15図３参照）、これは実際に子育てする中で、やりがいや喜びと同時に大変さもわかり、現実感をもって捉えているのではないかと考えています。

子どもとの接し方に自信がもてないという意見が増えている（P.15図４参照）ことにも注目したいですね。これには、実際的なノウハウが不足しているというケースや、夫婦間のコミュニケーションによるもの、また、雑誌やインターネットなど多くの情報にとまどっているケースなどがあるように思います。現代の母親の「少しでもよりよい育児をしたい」という思いから生まれる育児不安と似ているのかもしれません。



子どもを受け入れる楽しさを父親に知ってもらう

こうした状況を踏まえると、保育者のみなさんが、父親に「子育てには絶対的な正解があるわけではない」「どの家庭も、いろいろなことに悩みながら子育てをしている」といったことを伝えることはとても意味のあることだと思います。そうしたことで、少しでも父親の気持ちが楽になるといいですね。また、日々の子どもの遊びや発想の中に育ちを見つけるという、園で保育者のみなさんが日々感動を味わっていることを、ぜひ保護者にも伝えてほしいと思います。

そのためには、父親も足を運びやすい園、子育てを一緒に楽しめる園になることも大切です。とはいえ、父親は母親と比較すると、すぐに保育者や他の父親とおしゃべりできるというわけにはいかないこともあるでしょう。力仕事をはじめ具体的な作業をしながらだと自然と会話が弾むこともあるので、そんな機会をつくることも一案です。

園と父親の関係がより近くなることで、子どものありのままの姿を観察し、受け入れることの大切さを実感できるといいですね。保育者が大きな心と確かな見通しをもって子どもと接していることも伝わり、お互いの理解が深まるチャンスになると思います。

生涯の学びを支える「非認知能力」をどう育てるか

前号（2015年夏号）では、幼児期に育むべき力や姿勢としてOECD（経済協力開発機構）などが提唱する「社会情動的スキル」を特集しました。社会情動的スキルは、日本では「非認知能力（スキル）」と呼ばれ、今後、幼児教育の中で意識的に育成することが求められるようになります。園での保育の中に「非認知能力」を育てる活動をどう取り入れると良いのかを考えてみましょう。

インタビュー

支援の「発想」を転換すれば日常の遊びや生活の中で十分に育つ

人が生涯に渡りのびのびと学び、成長を続けていくのを支えるのが、幼児期から育む「非認知能力」です。園では、どのような学びやサポートによって「非認知能力」を伸ばせるのでしょうか。無藤隆先生が保育の現場の実例を交え、ポイントを解説します。

欧米を中心に世界中で注目される「非認知能力」

「非認知能力（スキル）」は、これからの幼児教育のキーワードになるでしょう。内閣に教育の提言を行う教育再生実行会議では、幼児教育の無償化や幼児教育アドバイザーの導入などさまざまな議論が進められていますが、非認知能力の育成は中心的なテーマのひとつです。平成30年度より実施予定の幼稚園教育要領や保育所保育指針には、非認知能力に関わる内容が多く盛り込まれるはずです。

非認知能力は、ＯＥＣＤでは社会情動的スキルと言い表されます。ＩＱなどで数値化される認知能力と違って目に見えにくいのですが、「学びに向かう力や姿勢」とも言い表せるでしょう。目標や意欲、興味・関心をもち、粘り強く、仲間と協調して取り組む力や姿勢が中心になるとお考えください。

近年、非認知能力は日本だけではなく、世界中で研究が進み、その重要性が認識されています。とりわけ議論が盛んなのは欧米です。というのも、従来、欧米の幼児教育は読み書きや思考力などの知的な教育が中心でした。しかし、幼児期の知的教育の効果は一時的なものに過ぎず長続きしないことが明らかになり、認知能力の土台となる非認知能力がクローズアップされてきているからです。加えて、非認知能力は幼児期から小学校低学年に育成するのが効果的という研究成果も注

白梅学園大学教授
無藤　隆
むとう・たかし
白梅学園大学子ども学部教授、同大学院子ども学研究科長。「幼小接続会議」座長のほか、文部科学省中央教育審議会委員などを歴任。専門は発達心理学・教育心理学。著書に『保育の学校（全3巻）』（フレーベル館）など。

目されています。

３つの課題を克服すれば「非認知能力」は育つ

一方、日本は欧米とは少々異なる文脈で非認知能力の必要性が論じられています。知的教育に重点を置いてきた欧米とは違い、日本の幼児教育は「心情・意欲・態度」を大切にすることで、非認知能力を育成してきたと言えます。しかし振り返ってみると、いくつか課題が見えてきます。

ひとつは、日本では特に意欲や興味・関心を大切にしてきましたが、非認知能力の重要な要素である粘り強さや挑戦する気持ちなどの育成はそれほど重視されていませんでした。

ふたつめとして、認知能力と非認知能力は絡み合うように伸びるという認識が弱かったと思います。どういうことかというと、意欲や関心をもって粘り強く取り組むと、自然に深く考えたり工夫したり創造したりして認知能力が高まります。そのように認知能力が発揮された結果、達成感や充実感が得られ、「次もがんばろう」と非認知能力が強化されます。こうしたサイクルを意識することで、認知能力と非認知能力は効果的に伸ばせるのです。

３つめとして、こうした姿勢や力は、従来、気質や性格と考えられがちでした。現在の議論では、これを「スキル」と捉えて教育の可能性を強調しています。例えば、子どもの興味・関心は保育者の環境づくりにより意図的に高められますし、粘り強さは励ますことで伸ばせます。あえて「スキル」と呼ぶことで、具体的な支援を通して子どもができるようになることを示しているのです。

こうした課題を踏まえ、もっと意識的に非認知能力を高めることが、今後の幼児教育では極めて重要になるとお考えください。

もっとも、幼稚園教育要領や保育所保育指針の考え方にのっとった園は、既に非認知能力を育てる基盤はととのっていると考えていいでしょう。ですから、全く新しい取り組みを導入するのではなく、非認知能力という観点から従来の保育を振り返って補完する視点をもってください。

豊かな環境や保育者の言葉が子どもの内面を育てる

続いて、非認知能力を育てる活動を充実させるための具体的なヒントを提示いたします。

現行の幼稚園教育要領と保育所保育指針でも、非認知能力の育成に向けた種はまかれています。例えば、協同的な活動は好例です。子どもたちが目標や意欲をもち協同する活動は、社会性が育ちますし、自分たちの考えを具体化するためには知的な工夫や粘り強さが求められます。既にこうした活動に取り組む園は少なくないでしょう。

さらに今後は次の３点に留意していただきたいと思います。

ひとつは、子どもがおもしろいと感じたり、関わったりしたくなる素材をふんだんに用意することです。こうした環境づくりは、園による差が大きいのが現状です。

例えば、積み木にはさまざまなサイズや素材があり、それぞれ遊び方は異なります。いろいろな種類を置くことで、遊びが広がりやすくなるでしょう。絵本も多くのジャンルにふれることで興味を喚起しやすくなります。

また、園庭にどのような葉っぱや花があるかによって、色水遊びの展開は変わります。さらにペットボトルや牛乳パックといった廃品を置いておくと、子どもが興味をもって自然と遊びが発生するはずです。

というように、環境を豊かにする方法はさまざまで、ひとつの正解はありません。それぞれの園の特性を生かして環境の充実化に努めてください。

ふたつめのポイントは、保育者が対話を通して、子どもの発想を豊か

にしたり考えを深めたりすることです。こちらも今は、保育者による個人差が大きいです。子どもに対する問いかけが不足していたり、一方的に言葉を提示するだけで対話になっていなかったりするケースが見られます。

実際の例ですが、ある園で子どもたちが水盤に厚い氷が張っているのを見つけました。ここで保育者が「良かったね」程度の言葉しかかけなければ、子どもはひと通り氷で遊んだり割ったりするだけで終わっていたでしょう。

しかし、保育者は対話を通して子どもたちから「お母さんや他のクラスの友だちにも見せたい」という言葉を引き出し、「どこに置いておこうか？」と問いかけると、子どもは話し合って日陰に置くことにしました。また、「明日も作りたい」という話になり、そのためにはどうすればいいかを考え始めました。

もともと子どもは、氷は寒い場所でできると直感的に知っていましたが、保育者との対話を通して明確に意識するとともに、氷への興味が高まって活動が広がったのです。

子どもが氷を見つけたのは「偶然」でしょうか。一見、そのようですが、これは「必然」と言えます。仮に子どもが水盤の氷を見つけなかったとしても、いつかは水たまりの氷や霜柱に気づいたはずです。子どもの育ちを捉え、「氷に興味をもつだろう」という見通しがあったからこそ、子どもの発想を広げる対話ができたのでしょう。言うなれば、子どもが気づくのを待っていたのです。逆に保育者が氷の存在を教えて一方的に活動の指示をしていたら、ここまで強い興味は示さなかったでしょう。

5歳児は「高度」な活動で小学校の学びにつなげる

3つめの要点は、小学校とのつながりを意識することです。といっても、小学校教育の先取りをするわけではありません。幼児期の学びを小学校以降の学習の土台と捉え、5歳児にふさわしい高度な活動を通して非認知能力を高める努力をしましょう。そのために、「しっかりと目当てをもって取り組んでいるか」「友だちと協力して進めているか」「力をもて余したり、遊びが停滞したりしていないか」といった視点から5歳児の活動を見直してみてください。

これまで幼小接続と言うと、小学校からの「こんな力を高めてほしい」といった要望を取り入れることが中心でした。しかし今後は、小学校側が幼児期の育ちを受け止めて発展させるという発想が大事になります。文部科学省も幼児期から大学までに一貫して資質・能力を育成するという方針をもっており、幼児期に培う非認知能力は、小学校以降の主体的な学びの土台と位置づけています。

小学校だけではなく、非認知能力は3歳前後の育ちにも大切なため、2歳からのつながりも意識したいところです。幼稚園の場合は入園前ですが、最近は子育て支援の場として園を訪れることも少なくありません。そうした機会も活用して子どもの育ちを捉えたり、家庭の状況を把握したりして、年少クラスの前半から非認知能力を意識した活動を展開することが望まれます。

支援を工夫すれば特別な環境や活動は必要ない

非認知能力を高める活動を検討する際は、「内容」よりも「育てたい姿勢や力」をベースに考えてください。必ずしも、特別な環境や活動は必要ありません。支援の工夫により、日常的な遊びや生活の中でも非認知能力は伸ばせます。

例えば、どの園にもある縄跳びや一輪車でも構いません。ただし、従来の保育からの発想の転換が必要です。「縄跳びが何回跳べるか」ではなく、「縄跳びを通し、何らかの目的をもったり、上手になるように工夫したり、根気強くがんばったりするか」などと非認知能力に重点を置いてください。子どもが非認知能力を発揮できるように支えた結果として、おそらく縄跳びのスキルも高ま

るでしょう。

ここで重要なのは、認知能力と非認知能力のどちらも、効果的に育成するためには、目標や意欲、関心が欠かせないことです。教室におとなしく座って先生の説明をじっと聞く活動だけでは、目標に向かうがまん強さや粘り強さは伸びません。

次にコマ回しの活動で考えてみましょう。意欲や興味を引き出すには、保育者が教えるより、年上の子どもが上手に回すのを見て憧れの気持ちを抱かせるのが効果的でしょう。なかなか回せない子どももいますが、ここでも保育者が手取り足取り教えるのは良くありません。他の子どもの姿を見て工夫したり、粘り強く練習したりする姿勢を引き出せば、非認知能力は伸びやすくなります。

数や文字の力も、非認知能力とともに高められます。

ある園では、園庭でかけっこの往復をする際、何往復したかを忘れないように、10 個の牛乳パックを用意し、その中にひとつずつおはじきを入れていました。この活動では、走る力やがんばる力などを高めると同時に、10 を単位とする数を自然と学べます。

文字に関しては、お店屋さんごっこでメニューや看板などを作成したくなることがよくあります。文字が書ける子どもが作成したり、まだ書けない子どもが書ける友だちに教わったりして自然と学んでいきます。保育者は、「もっと本物のお店らしくしたい」という気持ちを上手に引き出しましょう。

非認知能力を育てる支援と評価は表裏一体の関係です。きちんと評価できると支援の改善につながります。

非認知能力の評価は難しいのですが、園では具体的な活動を通して評価する方法が進めやすいでしょう。例えば、活動中の子どもの姿を文章や写真で継続的に記録し、「意欲的に取り組んでいるか」「工夫する力がどこに見えたか」などを検討します。一緒に子どもに関わる保育者が評価の基準を共有し、話し合う形にするとより客観的に捉えられるでしょう。そして不十分な点に対し、どのような支援をすべきかを考えます。

保育者の資質・能力を高める園内研修がますます重要に

非認知能力を育成したり、評価したりするためには、保育者が非認知能力について深く理解し、遊びや生活に見通しをもつことが欠かせません。これまで以上に保育者の資質や能力、経験が問われるようになります。そのため、保育者の研修がますます重要になります。

研修では、ビデオや写真などで具体的な保育の場面を共有し、意見を交わし合います。その際、「意欲を十分に引き出しているか」「認知能力とどうつながっているか」「保育者の関わり方は適切か」など、特に非認知能力の観点から検討を進めてください。こうした具体的な場面に基づいた研修を実践する園はまだ少ないですから、ぜひ取り入れていただきたいです。

大学などの保育者養成課程でも、非認知能力は重視されていきます。これまでもカリキュラムに含まれていましたが、今後はより具体的・分析的な教育が行われることになるはずです。

非認知能力は、理論を聞くと抽象的で難解な印象があるかもしれませんが、いったん感覚をつかむと難しいものではありません。試行錯誤を通じて一度でも子どもの中に非認知能力が育ったという実感を得られれば、その他の活動にもスムーズに応用できるようになるでしょう。

FOR 園長先生

「非認知能力」を育てるために園長先生に心がけてもらいたい３つのポイント

◎カリキュラム全体のマネジメントをしましょう

非認知能力の育成は、各年齢で連続した支援をすることがカギとなります。園長先生がカリキュラムの管理者として全ての子どもの年齢を見通した保育を検討してください。

◎保育室や園庭などの環境を見直しましょう

園環境の整備については、保育者だけでは判断できないことがあります。園長先生が保育者の意見を聞きながら、園環境の充実化に努めてください。

◎園内研修を実施しましょう

保育者の資質・能力を高めるためには、園内研修が不可欠。園長先生が率先して企画し、研修に対して積極的な姿勢を見せましょう。

Benesse®

表紙／裏表紙
神奈川県 ● 認定こども園　ゆうゆうのもり幼保園

『これからの幼児教育』刊行に寄せて

ベネッセは、日本の幼児教育・保育環境の充実を目指し、幼児教育・保育を担うかたに向けて、「保育の質」の向上に役立つ情報をお届けします。幅広い学問領域の研究や調査データをもとに、先生がたの思いに寄り添いながら、よりよい子どもの育ちについてともに考えていきます。

5PL001-W

これからの幼児教育 2016 春

2016年1月18日発行　発行人 山元倫明　編集人 渡邊恵子　発行所 (株)ベネッセコーポレーション
©Benesse Corporation 2016